

いつも明るく 前向きに

日本電子計算株式会社

西原 ゆかり

私の仕事

私は、日本電子計算（株）という情報サービス企業で、SE（システムエンジニア）の仕事をしています。早いもので、大学を卒業し、就職してから二年が経ちました。

大学では物質科学を専攻しましたが、コンピュータを使用した講義や研究を通して、IT（情報技術）に興味を持ち始め、システムの提案から設計、開発、運用などを行い、世の中のニーズに応えることができるSEになりたいと思ったのが、私の入社動機です。

当社では幅広い分野の開発を行っており、現在、私は厚生年金基金（企業年金）システムの開発に携わっています。

やりがいを感じる

さて「SEの仕事」と聞いて、みなさんは何をイメージしますか？中には、一日中パソコンの前でキーボードを打っている、暗く孤独な感じを思い浮かべる方もおられるかもしれません。

しかし、実際は違います。開発チームのメンバーや顧客とのコミュニケーションは必要不可欠であり、人との関わり



社員旅行にて 同期と司会
（向かって右）

合いも多くあります。

私が一人で顧客を担当し、初めての問い合わせがあったときのことです。ニーズに応えたいという強い気持ちとは裏腹に、話す内容がまとまらず、自分の気持ちに自信が持てなくなりそうになりました。しかし、精一杯の対応の後、そのお客様から何度も感謝の言葉をいただいて、本当に「やりがいのある仕事」だと実感したのです。

大切なもの

「いつも明るく前向きに」は私のモットーです。もし、自信を失くしそうになっても、自分をより成長させるチャンスだと思えば、また自信を持つて精一杯頑張れます。

みなさんも、自分を信じて、充実した学生生活を過ごして下さい。その中で得るものは、将来とても貴重で大きなものとなるはずです。

これ・これ・これ

喜んでいただくための 日々勉強

JTB奈良支店

河嶋 直子

大切にしたいお客様との 出会い

私の勤務するJTB奈良支店には社員が約五十名います。

団体旅行、修学旅行を担当する営業課と、店頭で個人旅行受付をする旅行課とに分かれており、私は旅行課に所属しています。

毎日、様々なお客様と出会い、旅行のプランを考え、手配する仕事をしていきますが、旅行から帰っていらしたお客様から、お礼や感謝の言葉をいただくときがこの仕事の一番幸せな瞬間だと思っています。

プロとしての仕事

店頭営業Ⅱ待受というイメージを持っていました。実際に仕事をしてみるとまったく違っていました。

インターネットで簡単にホテルの予約ができ、電車の時間が調べられる時代に、わざわざお店まで足を運んで頂くためには、私自身を気にいって頂くしかないのです。

入社当時は覚える事が多すぎて、仕事事が単なる作業になっていましたが、相手のことを思う、お客様の立場で考えられてはじめて、仕事といえるのだ



同期の友人と（向かって右）

と思え、最近やっと仕事に余裕が出てきました。これをさらにレベルアップするためには、私自身の経験を生かし、私にしかできない旅行を提案しなければいけません。そこまできてやっとプロと呼べるのではないのでしょうか。インターネットでは伝わらない人の暖かさとか思いやりを常に持ち、「あの人に会いに行くとなんか得した」とか「楽しかった」といつてもらえるよう、これからも日々勉強していきたいと思っています。

一つずつ 少しずつ

阪南市立
鳥取東中学校・教諭

下林 奈央

■達成感をともに

昨年四月に赴任し、現在、一学年の国語科担当、副担任として百六十人の生徒と笑ったり、怒ったりの毎日です。毎日が初めての連続で、驚くことばかりですが、中でも、学校行事の裏側を考えもつかないものでした。

私は生徒会の担当となり、生徒会役員と共に文化祭の準備に加わりました。文化祭終了後は「楽しかった」「またやりたい」という声も聞け、生徒たちと一緒に一つのを創る喜びを分かち合うことができました。



生徒会役員と（後列向かって右から2番目）

■一日の始まり

毎朝、登校してくる生徒に声をかけ、生徒用駐輪場を整理するのが日課となっています。

とめてある自転車を見ては、「Aさん、体調が戻って登校しているなあ」や「B君、今日は遅刻していないぞ」と生徒たちが元気に登校しているのがわかり、ほっとすると、同時に、学校から何か一つ、楽しかったと思えることを持ち帰ってくれるのを願います。そのために、私には何ができるのだろうかと、模索する日々は続きそうです。

■教壇に立つという責任

サッカーが得意で、サッカーに関することなら、何でも知っている男の子がいます。プロのような漫画を描く女の子がいます。そんな彼らから、知らない世界のことを教わります。ならば、私も、国語科のプロとして、知られざる国語の世界を、少し長く生きていく者として、その経験を伝えていかなければなりません。それが、私の使命でもあります。

しかし、今の私には、まだまだ足りないところがあります。私自身の知識や経験、一つひとつを通して世界を広げていくことが、生徒たちに伝える糧となると信じています。そして、教わる側の気持ちを忘れず、真正面から生徒と向き合える真のプロを目指します。

あ・と・ひ

赴任一年目で 任された『図工展』

尼崎市立立花小学校・教諭
中井 研二

■山村での講師経験を活かして

私の大学生活の大半は、卒業後の進路を探す、曖昧な生活でした。そんな時、真剣に教員を目指して勉強しようと思ったのは、大学の教官のすばらしい人間性に触れたからかもしれません。

卒業後、私は地方で、数校の小さな小学校の講師をしました。中には、子どもはたったの三人、先生は私一人という雪深い山中の分校もありました。

そして卒業から三年目の今年、ようやく小学校の正式採用となったのです。しかも、うれしいことに、大学時代に専攻した図画工作の専科での赴任でした。しかし同時に不安もありました。

理由のひとつは赴任先です。尼崎という、私には未知である、都会の子どもたちを相手にすること。そしてもうひとつの不安は、尼崎市立の小学校で隔年開催される、校内の展覧会「図工展」を成功させなければならないことでした。

■私が伝えられること

三〜六年生、約三百人の子どもたちの図工を担当することになり、名前を覚えるのにひと苦労というスタートでした。「初めての図工専科で、しかも秋には「図工展」を控えている。うまくいく

かなあ。」と思っていたのです。

しかし、子どもたちと接するうち、尼崎の子に自然の素材を肌で感じさせてやりたい。形や色だけにこだわらず、道具を使いこなすことにも力を注ぎたい、という思いが湧いてきました。そこで、講師時代を過ごした地方の山に向き、切り出してきた木材を、子どもたちに小刀で削らせたり、粉の状態の土から粘土をねらせたりしたのです。

実際、小刀やノコギリの危なげな手つきにはハラハラしました。痛い思いをした子もいました。初めての年に大きな行事をまかされ、全体を見通し動かすのは本当に大変な事でしたが、多くの人の力を借りて、なんとか開催にこぎつけることができました。

■見る者に伝わること

展覧会には多くの人に来てくれました。かつてお世話になった大学の教官も見に来てくださいました。「先生すごいことやったね」「子どもたちの頑張りが見える」「この言葉を聞いたとき、はじめがむしやうに模索していたことが間違いはなかったと思いました。そして、会場で子どもたちの嬉しそうで誇らしげな顔を見た時、ちよつとだけですが、教師としての自信がつけました。



図工展で